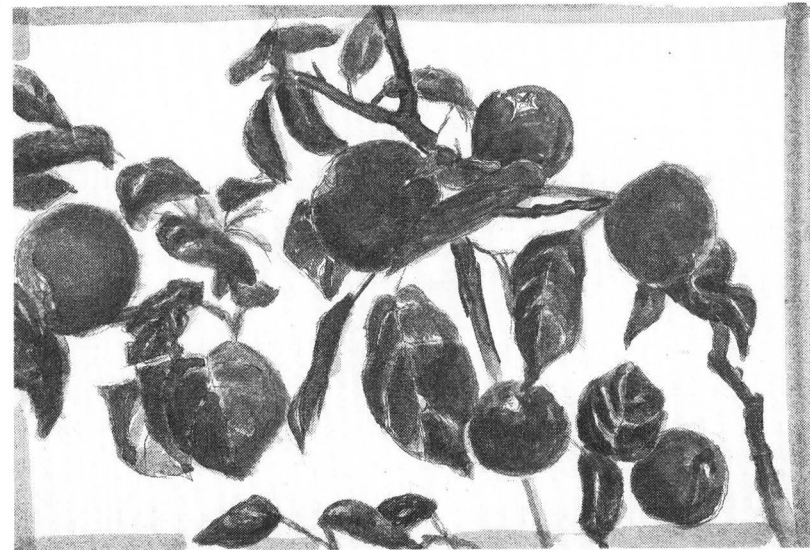


寄贈いただきました

自治労京都府本部より写真三〇点

自治労京都府本部より、一九九五年一月二五日連合近畿ブロックの動員のさい、神戸市役所横でのヘリコプターからの物資受け渡し作業風景を写した写真三〇点をいただきました。



神戸市生活再建本部より 二冊

阪神・淡路大震災
神戸の生活再建・5年の記録

二十三万人を超える避難者、三万一千世帯の仮設住宅入居者など、被災された方々が仮設の住まいから恒久住宅へ移られ、生活の基盤である住まいの再建を完了されるまでの過程はどのようなものであったか。神戸市生活再建本部の活動を中心に振り返ることにしました。

この記録は、被災者の生活再建に向けて神戸市がどのように行動し、何ができなかったか、現時点で当時を振り返るとどうであったか。単なる反省でなく、震災の教訓として警鐘せしめるものは何かという視点でまとめています。

本記録は、可能な限り実録に近い形でまとめており、神戸市が、場面場面で直面した問題、苦悩した内容にまで踏み込んだつもりです。生活再建への対応には、都市共通のマニユアルはなく、都市の事情や被災の状況により違ってきますが、今後の各都市での備えとして参考になれば幸いです。震災後五年間の記録の要約はインターネットのホームページで公開しています「激動期」「生活支援期」「自立支援期」の3ステージに沿って、時系列で追っており、生活再建の大筋を概観していただければと思います。

阪神・淡路大震災
神戸の生活再建・5年の記録



神戸市生活再建本部

ホームページアドレス

<http://www.city.kobe.jp/cityoffice/15/020/quake/saiken/>

阪神・淡路大震災
神戸の生活再建 報道記録
神戸新聞記事データベース
より抜粋

(平成十二年三月発行)

平成七年一月一七日の「阪神・淡路大震災」発生の日から五年余が過ぎました。神戸市生活再建本部は、このほど震災後の復旧・復興への歩みを、前述の冊子としてまとめ、発行しました。この報道記録は、その資料集としてまとめたものです。阪神・淡路大震災「発生の日から、平成十二年一月までの五年の間に、神戸新聞に掲載された神戸の生活再建関連記事を中心に抜粋し、編集したものです。(掲載された日付順に記載)

ありがとうございました。

人・街・ながた

震災資料室だより

人・街・ながた

震災資料室

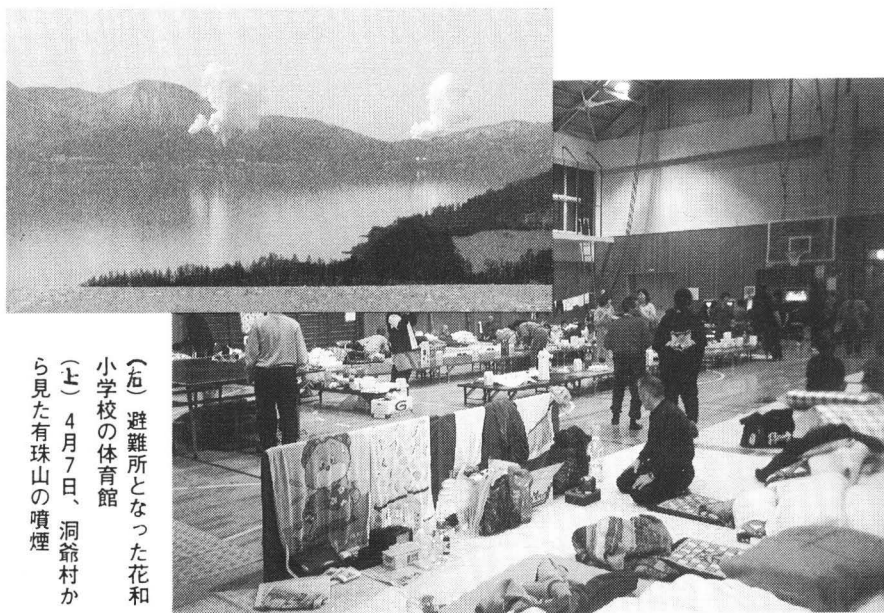
発行

〒653 神戸市長田区北町3-4-3
電話(078)579-2311発行人/寿 広文
編集人/武川・福谷

第41号

もくじ

- 1 有珠山 緊張続く
- 2 文化財レスキュー隊
- 3 「震災資料室」の感想
- 4 寄贈いただきました



(左) 避難所となった花和
小学校の体育館
(上) 4月7日、洞爺村から見た有珠山の噴煙

有珠山
緊張続く

三月三十一日に噴火した有珠山。伊達市、虻田町をはじめ各自治体は二十四時間体制で対応しており依然緊張が続いている。

先の阪神大震災時、二万二千人の自治労ボランティアの責任者であった齊藤さん(現、公務員連絡会事務局長・北海道出身)から現地レポートが届いた。

住民の九割が避難している虻田町は拠点となる町役場そのものが避難地区にあり、四月三日、豊浦町に役場機能を移転した。

また、避難箇所が四町村十二カ所に分散しており、そこで業務にあたっている職員も避難者であり家族との連絡も取れない状態であった。札幌をはじめ各自治体と職員労組は現地職員の負担軽減を図るため支援業務を行っている。

花和小学校避難所へ配置された佐藤さんの報告によると「洞爺湖温泉町と月浦地区の住民五十五世帯百二十三人が避難しているが、事前避難があったことで死傷者がいないこと、水電気・ガス等ライフラインが整っており、なにより自治会が設立されて避難生活は各々役割分担がされている。今後の噴火への不安があるが何とか自分たちの力でこの危機を乗り越えようとの力強さがあった」また現地で大変と感じたのはマスコミへの対応で「行政側の情報伝達は電話連絡だけで、本部で決まったことが現場へ届く前にマスコミ取材が入り対応に苦慮している。しかし、伝達等は全て自治会を通して行われている」とのことだ。

齊藤さんは「今のところ北海道で対応しており全国への支援要請は火山活動をみながら検討したい」と述べている。なお、当震災資料室へ要請のあった「物資要求カード」や「避難所日報」を急遽送信した(続)

文化財の被害調査

文化財レスキュー隊 佐藤定義
(神戸市住宅局住環境整備課)

私たちが出会った未曾有の災害が薄らぎかけてきた矢先の有珠山の爆発は、日本が災害列島であることを改めて示した。

有珠山の爆発は、予知がなされ住民の避難が終わってから人的な被害がなかったことは幸いだったが、現地では震災同様に多くのものが失われていることだろう。

阪神大震災では本当に多くのものを失った。当時私は、教育委員会の文化財課に所属して「風見鶏の館」や他の多くの文化財建造物の修理を担当していた。指定されていた文化財はほぼ修理され元の姿に戻ったが、未指定の歴史的建造物は姿を消した。そして、建物とともに文書や古い民具あるいは什器・屏風・長持ちといった現代生活に合わなくなった多くの生活関連物品が価値の確認が行なわれないままに廃棄されていた。

そうした状況に危機感を抱いた文化財関

係者は、震災の混乱の中から未指定だが価値の高い文化財を救出するため「文化財レスキュー隊」を結成し、貴重な歴史的資料の散逸をくい止めるために立ち上がった。

文化財レスキュー隊

阪神・淡路地域には、重要文化財・美術工芸品をはじめ多くの動産文化財が収蔵されていたが大震災で二十万棟にも及ぶ建物が被災し、所蔵されていた動産文化財も被災した。阪神地域の特色として動産文化財の所蔵は個人所有が多く、建造物のように道路を歩いて被災状況を調査することは不可能で、実態把握は困難を極めた。

また、日本文化の特徴として動産文化財に使用されている材料は紙や木を使ったものが多く、大震災にかろうじて残っても風雨に晒されるとその価値を消滅してしまうものもある。また被災建造物の撤去に伴い廃棄・散逸する可能性も高く早急に収蔵状況の確認と保護をする必要があった。兵庫県教育委員会は文化庁と連絡をとり、将来への文化遺産継承に重要な役割を持つ動産文化財の救出のため日本で初めて「文化財レスキュー隊」を結成した。

金剛力士像

西区平野町 薬師寺

レスキュー隊によって保護された事例として西区平野町にある金剛力士像(未指定)がある。この像は京都国立博物館の専門家が調査・救出にあたり、後世の修補も加わるが金剛力士像としては全国的にも数少ない古例であり、その中でも作行きが優れており文化財として保存を図る必要があると助言をうけ平成九年六月に修理が完了し、十月に神戸市の文化財と指定された。(続く)



(写真は本文とは関係ありません)

「震災資料室」の感想

津村 正茂

あの阪神大震災から5年余りが過ぎて、震災の記憶もだんだんと風化しています。しかし、平成7年1月17日未明に発生した震度7の強烈な地震の恐怖は、今でも鮮明に覚えています。

あの日から長田区役所職員として、今まで経験したことのない場面で震災関連業務に従事した貴重な経験から、「人と人が支え合う」ことの大切さを学びました。

そして、阪神・淡路大震災の状況を永く記憶し後世の人々に継承するため、被災地の中の長田区役所に、「人・街・ながた震災資料室」を平成9年1月に開設し、長田区の震災関係資料を収集するとともに広く一般に公開してきました。

何故か私も当初から資料室のスタッフとしてかわり、他の職員とともに資料の収集・整理・保存作業に従事し、いろいろと貴重な勉強をいたしました。

この3年間に、「震災資料室展」等いろいろな場所で9回も開催しました。多くの人に見学をしていただき、来場者の意見・感想に勇気づけられました。

また、この「震災資料室だより」を毎月発行することにより、長田区の情報等を発信してきました。月に一度の編集会議で紙面の構成等を打合せし、原稿の清書・資料の紹介記事等も作成しました。

毎月、締切りの日時までに記事を仕上げるのは大変でしたが、何とか穴をあけずに書き続けて、第1号から第40号までを中断することなく発行することができました。避難所日誌等の資料は、年月が経っているため独特の匂いが漂い、当時の避難所の様子がしのばれ、避難者・ボランティア・従事職員等の苦労がうかがわれました。

また、長田区の歴史、人口の推移等の資料についても興味をもって学ぶことができました。

その他にも震災関係の研究者、図書館職員等の交流を通じて幅広い知識を得ることができ、未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災は、私にとって忘れることができない出来事となりました。

震災資料室の業務に携わったことで、会計室の仕事以外にいろいろなことを勉強し学ぶことができて本当に感謝しています。ボランティア的な立場で気楽な面もあり、パソコン等の操作技術を習得することもでき、自分の能力を磨き向上する契機にもなりました。資料の整理・リストの作成・インターネットによる発信等の仕事もやりたいと思っていましたが、残念ながらできませんでした。これからは時間的にも余裕ができますので応援できると思っています。

地震発生直後の衝撃や感動が時間の経過とともに記憶の片隅にやられるのは仕方がないことです。

しかし、震災により生れた気持ちの変化を前向きな力に転化しようと努めることも大切です。

ながたの街の復興はまだこれからの状況ですが、ひとりひとりが希望をもって前向きな姿勢で取り組んでいけば、長田区の再生・発展につながると思います。

この3月末に定年退職いたしました。長い間、大変お世話になり、本当にありがとうございました。